

今昔物語集本朝部の童話的考察の一斑

中野 一雄

緒言

私が本稿において、特に今昔物語と児童説話との関連について採り上げたのは、近世以後児童の読み物に対して種々の点から影響を与えていると感じたからであり、明治中期以後児童読み物の目ざましい興隆について、この方面に関心を寄せている人達が一斉に今昔物語の説話を採択して、児童読み物に寄与しているからである。

そしてもう一つの点は、幼少時代の情操教育は非常に重要なことであり、空想の多いこの時期の子供によい読み物を与え、また日本古来の精神を知らしめ、古典に親しみを感じさせて、祖先の文化を伝えるという意味からみても重要であると信じているからである。勿論極めて未熟で、しかも杜撰の謗りは免れ難いが、今後この方面に研究を進めてみたい考えである。

なお、今回は私の考えている一部だけを、ここに述べさせていただくこととする。

目次	頁
第一、序論	一四
第二、童話の語義、本質、分類	一四三
第三、今昔物語の研究	一四九
第四、後世への展開（童話の立場を主体として）	一五五
今昔物語の童話的価値	一五九

(一) 童話的叙述形式の確立	一五九
(二) 現代童話への直接的影響	一五九
第五、参考資料	一六三

第一、序論

1 私が今昔物語について興味をおぼえたのは、次のような理由による。

○ 第一に、物語が非常に広範囲にわたり、特に本朝世俗篇において豊富な話材を提供しているからである。

○ 次に、平安時代の王朝文学の中にあつて、庶民の生活、風俗、思想などを知る上に極めて適しているからである。

○ 庶民はいつの時代でも国の礎であり、また国家を形成する上からも最も数多く、これらの人々の情態を知ることが、その時代の趨勢を知る上に大切であると考えるからである。

○ この時代の巷談街説が基調となり、後世の物語文学への源流となり、特に明治中期頃より再び採り上げられ、研究の対象となつていわゆる「童話文学」興隆のもとを作り出した。と考えるからである。

2 近來今昔物語研究がますます盛んになり、その研究書も百五十余冊以上を数えられるに至つた。これは、今昔物語の価値

を再認識して来たためであると思う。

3 しかし、いわゆる児童向きの説話、すなわち童話の源泉としての考察については、まだ今後も大いに採り上げられ、大いに研究せらるべきであろうと思う。

4 幼少年時代に与えらるべき物語、すなわち童話は、人間の情操教育上からも極めて必要であることは、緒言にもちよっと述べておいたが、私はこの点に長い間興味をもっていたので、今回ここにその一端を発表した次第である。

第二、童話の語義、本質、分類

1 語義

芦谷氏はその著「童話学」で、「童話」ということばは、馬琴や、京伝によって用いはじめられたことばであり、比較的最も新しい言葉であると共に、その内容の意義も鮮明であるようである。「と、いい、一部の童話作家の中には、現代の新らしい創作的な話だけが童話であって、そうでないものはお伽噺であるというふうに考えているものもあるが、これは歴史的事実を無視した謬論である。と非難しておられる。私もこの説に同感である。そこで試みに馬琴と京伝の「燕石雜志」と「骨董集」に、童話をどのように解しているかを調べてみた。ここでは「わらべものがたり」並びに「むかしばなし」と訓ぜられている。

○燕石雜志(卷四) ④桃太郎

「童話に、昔老夫婦ありけり。夫は薪を山に折り、婦は流に沿うて衣を洗ふに、……」(有朋堂文庫四百八十六頁)

○骨董集(上編中之卷) ④打出小槌 猿蟹合戦(三十二)

「異制庭訓」に、祖父祖母之物語とあるは、むかし／＼ちよとばよとありけり、という発語をとりて、名目にしたるものなるべけれ

ば、童の昔ばなし、いとふるきことなり。おのれ二十四五年前、童話の出所をたづねて書きとめたもの、童話考と名づけて一冊あり。いまだ考の足ざる所あれば、年ひさしくひめおきぬ。——(中略)——童話の原をたづぬるにおほくは仏説より出たり。——(中略)——虎関和尚の異制庭訓は、今文化十年より、凡五百年前の書なれば、祖父祖母の童話のふるきをおもふべし。五百年前の童話、唯童の口ずさみにつたふるのみにて、今に残れるは不思議といふべし。なほ愚考あれども、他日童話考を刻すべき志あれば、ここにはもらしつ。」(有朋堂文庫百十四頁)

以上ではっきりわかるが、燕石雜志には、いわゆる童話(わらべものがたり)が巻四に猿蟹合戦・桃太郎・舌切雀・花咲翁・兔大手柄・獼猴の生胆・浦島の子の七説話の筋およびその考証をしている。馬琴が大衆作家であるとともに、童話家であることがよくわかる。

京伝は、前述の引文によって、童話(むかしばなし)と訓じているほかに、童話考(どうわかう)などと読み仮名を付している所を見ても、確かに童話(どうわ)とも読んでいたことがわかる。彼れの骨董集には、打出小槌と猿蟹合戦の二つだけしか取り出してないが、「他日童話考を刻すべき志あれば、ここにはもらしつ。」とある所に拠れば、後にきつと童話について一篇にまとめた上、出版でもする考えであったものであろうか。寡聞にして見当らないし、諸先輩も「恐らく未出版であろう。」とっておられるので、これはそのままになってしまったに相違ない。それにしても、童話に対して一見識を持っていたことは、先覚者といふべきであらうか。

次に、日本文学辞典の巖谷小波・山内秋生両氏の「童話」に対する解説をここに転記すれば、

「(名義) 童心を基調とする一種の文芸形式で、通俗には児童に聞かせる説話の意味である。童話という文字の成語は、曲亭馬琴の

『燕石雜志』の中に用いられたのが古く、馬琴はこれに、『わらべものがたり』と振仮名している。同時代に山東京伝もその著『骨董集』の中に童話の文字を用い、『どうわ』という音読みも用いたが、又『むかしばなし』という振仮名を施した。一面においては、つれづれを慰むることを意味する『お伽』という言葉に則り、江戸時代に版本となったお伽草子などから、『お伽ばなし』という名称も用いられた。明治に至り巖谷小波は、古典及び口碑伝説などによるものを『昔噺』と呼ぶに對し、主として創作及び再話として新たに編述するものを『お伽噺』と稱した。その意は第一に児童に親しみ易き語であり、且つ童話という広汎なる範圍から、文芸作品としてのそれを區別するにあたって、『お伽文学』などの如く、長く通稱となっていたが、教育家・学者などの間には總括的に『童話』の名稱を使用する者多く、大正時代に至り、いわゆる新興童話の勃興を見、一般文芸家が盛んに創作を試みた頃から、古典・伝説・創作の如何を問わず、『童話』という総稱を一般に用いるようになった。英語の Fairy Tale 独逸語の Märchen は、ともに日本語の童話に相當するものに用いられているが、語源からいうと、前者は小神仙（侏儒）の物語という意であり、後者は伝説・小話、または不思議な物語といふ意味をもつもので、いづれもその国の童話の起原を現わしているに對し、日本語の『童話』は児童にきかせる話という文字通りの意味を適切に現わしている。（『日本文学大辞典に拠る』）

なお、両氏は（性質）で「名義の変遷が示す如く、その性質もかなり複雑している。まずその成り立ちによって大別すると、」と

(一) 古典童話 (二) 口碑童話 (三) 文芸童話

(イ) 神仙譚 (ロ) 英雄譚・奇人伝 (ハ) 寓話

を挙げているし、本質や文学に關しても述べている。さて、この三つの言葉を對照してみると、

むかしばなし——話の形式を示しており、おとぎばなし——話の効用を表わしており、童話——話の本質を示している。

2 本質

童話の本質とは、童話の教育的価値およびその教育的職能をさしているのであって、広範な意味における教育的使命が考えられる。

芦谷重常、小川未明、菊地寛、馬淵冷佑、浜田広介、奥野庄太郎、湯浅城二、松村武雄、ヘルマン・ホイヴェルス、巖谷小波、山内秋生などの諸氏によって論じられている説を要約してみると、

(イ) 児童精神の成長進展を期するための教育的使命を有し、

(ロ) 児童芸術心の培養にある。としての。すなわち、芦谷氏は「遊びに關連して」の所で、児童の余剩精力を美化し、芸術化し、想像力をじゅうぶん發展させて児童の精神を伸ばしてゆき、豊富な生活記録を提示せしめるとも言っている。小川氏も、童心の世界を耕すことであって、美を感じるに、また不可知の現象に對して驚異を感じるに、また正義に對し、不幸な者に對する純情、殉情、新鮮心を耕すものである。といい、菊池氏は、よい道念の芽を育成し、自然や人生を正しく見る眼と、美しく優しく素直に感ずる精神とを与えたいと思う。と言っており、馬淵氏は、児童が自己の生活に引きあてて深く考えこむもの、児童の内界を浄化するものであり、あるいは実生活上の常識を与えるものでなくてはならぬ。と言われ、浜田氏は、その信条として、ものを愛し、なつかしみ、したしむ心および詩的に、心もちを音楽的に出すように努めておられ、奥野氏は、偉大な人物をつくりあげるのには、童話をもってその幼年時代に基礎を作り、大きな想像力を養い、大理想の幻影を描き得る子供たらしめよ。と強調し、湯浅氏も、子供の心靈のための教材が童話

である。と言われ、松村氏は、真に彼等の心性の糧となり、美しい心の光となって、その言動から燦然と放射し、人をしてゆかしい性格と感ぜしめ、あるいは児童の心肉に知識をつちかい、自ら内存的な力で成長して、美しい花実を生ずるような教育、この真の教育こそ童話の使命でなくてはならぬ。と喝破している。巖谷・山内両氏も、童心を基調として真理を暗示し、人生を象徴する芸術が童話である。と断言している。

以上諸氏の主旨により、幼少年時代の精神養成がいかに大切であるか、いわゆる教育の型にはまらない、児童に対する精神教育が重要であるか、児童芸術心の培養がいかに必要であるか。ということがはっきりとわかる。童話の本質もここにある、ということが言えるよう。

3 分類

童話の分類については形式上から、内容上から、歴史上からそれぞれこの道の研究家諸氏が、極めて精細に述べておられるので、一応ここにも記し、併せて私は用途上からの分類を加えて述べることにし、以下簡単に記してみたいと思う。

(一) 形式的分類

芦谷氏は実際研究の上から、形式上、より多く効果的にその特質を考察し、十九項に分類している。

嬰兒譚、問答譚、幼兒譚、歌謡体の話、絵ばなし、無意義譚、笑話及び落し話、お伽噺、寓話・譬喩及び教訓譚、実生活譚、小説及び小品、英雄譚、伝説、神話、歴史譚、自然譚、事実譚、宗教譚、文芸譚がこれである。

また、松村博士はその著「童話及び児童の研究」の中の第五章に「童話は、その初めは主としてお伽噺を意味していた。しかし児童の心靈に全一的な発達を与えようとするならば、単にお伽噺だけで

は不満足である。また物語そのものの方面から見ても、児童の「真の心の糧」となり得べき本質的価値を有するものは、決してお伽噺だけに限られていない。それ故近時に至って、童話の意義を拡充して、苟しくも児童の徳性知力情緒などを啓蒙する力を有し、且つ彼等の読み物としての芸術的合宜性を有する物語は悉くこれを探って、童話の領域に属せしめるようになった。吾人もこうした広い意味において童話を取り扱うことにする。そうすれば童話は次のような各種の物語を包括することにならなくてはならぬ。」と前置きされ、以下のような項目を掲げている。

(1) 幼稚園話

(A) 物語の全部もしくは大部分が韻律をもっている詩の形式を備えるもの。

(B) 散文の形式をとってはいるが、その文句や全体の結構が一種の節奏を有するもの。

(2) 滑稽談にも (A) 無意義譚と (B) 笑話の二つがある。

(3) 寓話は 教訓が第一義で、興味は第二義であることと、これは「作られた物語」である。

(4) お伽噺 (5) 伝説 (6) 神話 (7) 歴史譚 (8) 自然界の物語 (9) 実事譚 に分類している。

芦谷氏のも、松村博士のも同じく易より難に、簡単より複雑に、幼より長にという並べ方であるように思われる。そしてかなり両氏とも似通った点のあるのを見受ける。ただ松村博士の説には随分欧米専門学者の考え方がはいつているように思われる。

(二) 内容的分類

芦谷氏は、その著「童話学」の中に、旧来の学者が行なっていた所の、次のような内容的分類法のあることを示している。

神仙譚、英雄譚、寓話。

この分類法は、簡單明瞭であり、且つ適切な分け方であるから、従来広く行なわれているが、すべての童話がこのように判然と區別されているわけではなく、時としてはこの三つの要素が混交して存在していることが多い。

(三) 歴史的分類

岩谷氏はまたこの分類法を立てている。

古典童話、口碑童話、芸術童話

がすなわちこれで、わが国を始め各国の古典によって残されている童話は数多い。たとえば、古事記、日本書記、風土記、万葉集を始めとして今昔物語、軍記物語などわが国童話の宝庫であり、聖書、イソップ物語、アラビアンナイトなど、いづれも現在まで残されている童話の中でも不滅の光を放っている。

口碑童話は、長期にわたって民間に伝承され、口伝えに残ったもので、姿をかえて民話となったものもある。

芸術童話には、アンデルセンやワイルドの童話などがある。

以上は成立の経路から分けられた分類法であるが、同じような考え方で巖谷・山内両氏も、古典童話、口碑童話、文芸童話に分けているし、内容については神仙譚、英雄譚、奇人伝、寓話に分類しているので、この分け方が定石といってもよいのであろうか。

私は以上の外に左のような分類を試みた。

(四) 用途上の分類

童話の本質上からみれば、その精神的要素においては同一であるが、使途の上から自ら違いが生じてくる。

宗教童話（仏教童話・キリスト教童話）

教育童話（童話の本質が児童の精神教育であり、児童芸術心の培養であることは既述の通りで、教育童話であるが、ここでは直接教育上応用される意味での童話ということである。修身童話、地

理歴史理科に属する科学童話）

芸術童話（芸術的、文学的香気のある童話で、近来この種のもの
が非常に多く、島崎藤村、小川未明、芥川竜之介、菊池寛、楠山
正雄、鈴木三重吉、坪田譲治その他多くの作家諸氏が立派な作品
を書いている。）

以上で童話に対する私の所見の一端を述べさせてもらったので、次に本論の今昔物語とその童話的価値などについて略述したいと思
う。

第三、今昔物語の研究

1 説話の記述形式（外形上）

今昔物語の外形的の面を記述するに先だって、作者のことについて一言触れてみたいと思う。

今昔物語の作者については、従来宇治拾遺物語序文によって、源隆国であると認められ、国文学書目集覧（垣内、毛利共著）にもはっきりと隆国であると記してあるが、坂井衡平氏の研究発表以来大きな話題となり、島田退蔵氏、長野嘗一氏を始め、多くの学者、研究者がいろいろの角度から研究し、論述されている。しかし未だに定説はなく、仏家でしかもやや成年に至って遁世した貴族の入道した者であるとか、後人の増補整頓を加えて現在の物語に発展したものであるとか、「宇治大納言物語」が種本となっている。などなお多くの研究問題が残されている。しかし説話を一瞥しただけでも、

一、これだけの説話を集めるには一朝一夕ではなく、相当の年月を要したこと。

一、只無秩序に集めて並べたものではなくて一定の構想により正

しい順序をきめ、その分類もかなり整頓されているゆえ、相当意を用いて編集していること。

一、説話形式の一定していること。
一、文章は余り優雅ではなく、大和文が盛んであり流麗な文章の流行した同時代に、漢文句調である点から考えて、また漢籍からの出典も多い点からみて、漢学の素養深く漢字に傾倒しているものであること。

一、かなり細かく庶民生活を記述している所からみて、下情に通じ興味を持つている人であること。

一、説話から考えて、仏教主義的色彩の濃い人であること。
一、ただ単に口伝えによる口碑伝説ばかりではなく、相当根拠ある出典も考えられ、ある程度の文芸的方面に資質があり、古実や古典などにも明るい人であること。

一、隆国は承保四年（紀元一七二三）七月九日に薨じているので、本物語集の成立を大体嘉承、天仁の交（一七六六―六九）とすれば、薨後三十年の所産となること。

などの素質を具備したものであることは一応考えられるのである。さて、本説話集が童話としての価値が大で、現代童話の宝典としてその源泉となっており、また当時の子供たちに聞かせたであろうこれらの子供向きの説話に大きい価値のあることを提唱したのである。

そこで本集説話の記述形式がいかに整然としているか。それが後代の児童向き説話に対して、いかに影響しているかについてここに述べてみようと思うのであるが、その記述形式を記すに当り、文例を二つ程掲げてみることにしたい。一つは仏法談中より、今一つは世俗談中より採り上げてみた。

○例一、（巻第十七、第十一話）

駿河国富士神主婦依地藏語第十一

今昔、駿河ノ国ノ富士ノ宮ニ神主ナル者有ケリ、和氣、光時ト云ケル、妻夫相共ニ年来ノ間、慇懃地藏菩薩ニ仕ケリ、但シ光時神社ノ司ト有リテ、依僧ニ値フ所ニ下馬スル事無シ、此レ古ヨリ彼ノ宮ノ例也、而シテ光時月ノ廿四日ニ家ヲ出テテ、馬ニ乗テ道ヲ行クノ間、見レト年十七八歳許ナル僧歩（ニイ）チ来リ値ヘリ、光時本ノ習レハ、下馬セシテ馬ニ乗テ僧ニ物ヲ云ニ、此ノ僧忽ニ盪消ツ様ニ失、光時恐レ恠ム家ニ返テ、其ノ夜光時夢ニ形テ端正ナル小僧出来テ、光時ニ告テ云ク、今日道ニ汝ニ値ルハ、此地地藏菩薩也、汝慇懃我ヲ憑ムト云トモ、他ノ僧ニ値テ不下馬ス、僧皆是レ十方ノ諸仏ノ福田ノ形也、此レ供養スル人ハ無量ノ功德得テ、無量ノ福德得ル也、況ヤ我カ身亦僧ノ形也、何シ忽緒ニ為ルヤ、努々此レ後馬ニ乗リ乍僧ニ値テ事無カト宣フト見テ夢覺テ、其ノ後光時涙流シ咎悔、上下ノ論僧来リ見テ、遠ヨリ下馬シテ礼シテ云ケルヤ、

○例二、（巻第三十、第九話）

信濃国姨母弃山話第九

今昔、信濃ノ国更科ト云フ所ニ住者有リ、年老アリケル姨母ヲ家ニ居ニテ、祖ノ如クシテ養テ年来相副テ過シケルニ、其ノ心ニ此ノ姨母糸厭ハシク思ヒ、此レカ姑（イノイ）如クシテ老屈ニ居テ極ニ思ヒ、常ニ夫ニ此ノ姨母ノ心ノ口口ク悪ク由リ云聞セシレハ、夫六借事カテ云テ、此レ姨母ノ為ニ心ニ非愚ナル事共多ク成リ持行ケルニ、此ノ姨母糸痛老テ、腰ニ二重ノ居、婦弥此レ厭テ、今ニテ此レカ不死ノ事思ヒ、夫ニ此レ姨母ノ心極ニ思ヒ、深山ニ行テ弃テト云ケレトモ、夫糸借カテ不弃サケルヲ、妻強ニ責云ケレハ、夫被責化テ弃ムト思ヒ、心付テ、八月十五夜ノ糸明ノ夜、姨母ニ去来給テ、姫共寺ニ極貴事為ル、見セ奉ルムト云ケレハ、姨母糸吉事ヲ語テ云ケレハ、男撞負高キ山麓ニ住ケレハ、其ノ山ニ遙々ト峰ニ登リ立テ、姨母下リ可得クモ、非ス程ニ成テ、打居ニ男逃返テ、姨母ヲ叫ビ、男答ヘモ不為テ逃返テ、然家ニ思ヒ、

妻ニ被責テ此山ニ弃テツトキ、年来祖ノ如ク養テ相副テ有ツルニ、此レテ弃ツルカ糸
悲思ニケルニ、此山ノ上ヨリ月ノ糸明ク差出タリシレハ、終夜不被寢恋悲
思テ、独言ニ此クナニ云ケル、「ワカコムロナクサメカネツサラシナヤヲ
ハステヤマニテルツキヲミテ」云テ、亦其ノ山峰ニ行テ姨母ヲ迎ヘ將
来ヲリケル、然レ本ノ如ク養ケル、然レ今ノ妻ノ云ハム事ニ付テ、由無事ヲ不可
免ス、今モ然事ハ有ヘシ、然シテ其山ハ其ノ姨母弃山ト云ケル、難噀シト云フ
譬ハ旧事ニ此レヲ云フニツ、其ノ前冠山ト云ケル、冠巾子ニ似タリケルト、語リ
傳ヘタルトヤ、

この二つの例で、説話の叙述形式がいかに整然と一定の型にはま
っているかがわかる。そこでこれを七段階に分けてみるならば、

第一段

今は昔

第二段

駿河の国の富士の宮に神主なる者有りけり

。信濃の国更科と云う所に住者有りけり

第三段

。和氣の光時とぞ云いける。妻夫相共に年来の間、慇に地藏菩薩に
仕えけり、但し光時神社の司と有りて、依りて僧に値う所に下
馬する事無し、此れ古えより彼の宮の例也、

。年老いたりける姨母を家に居えて、祖の如くして養いて年来相副
いて過ごしけるに、其の心に此の姨母糸厭わしく思えて、此れが
姑の如くにて老い屈まりて居たるを極めて慥くおもいければ、常
に夫に此の姨母の心の□□く悪しき由を云い聞かせければ、夫六
惜しき事かなと云いて、此の姨母の為に心に非で愚かなる事共多
く成り持て行けるに、此の姨母糸痛く老いて、腰は二重にて居た
り、

第四段

。而る間光時月の廿四日に家を出でて、馬に乗りて道を行く間、見
れば年十七八歳許りなる僧歩み(にイ)て来たり値えり、光時本の
習いなれば、下馬せずして馬に乗り乍ら僧に物を云うに、此の僧
忽ちに搔き消つ様に失せぬ、光時恐れ惟しむで家に返えりぬ、
。婦は弥よ弥よ此れを厭いて、今まで此れが不死ぬ事よと思いて、

夫に此の姨母の心の極めて慥きに、深き山に將行きて弃てよと云
いけれども、夫糸惜しがりて不弃ざりけるを、妻強ちに責め云い
ければ、夫被責れ弃びて弃てむと思ふ心付きて、八月十五夜の月
の糸明かりける夜、姨母に去来給え、姫共寺に極めて貴き事為
る、見せ奉らむと云いければ、男搔き負いて高い山の麓に往きけ
れば、其の山に逸々と峰に登り立ちて、姨母下り可得くも非らぬ
程に成して、打ち居えて男逃げて返えりぬ、

第五段

。此の夜光時夢に形ち端正なる小僧出でて来て、光時に告げて云わく
「今日道にして汝に値えるは、此れ地藏菩薩也、汝ち慇ろに我れ
を憑むと云えども、他の僧に値いて不下馬ず、僧は皆是れ十方の
諸仏の福田の形也、此れを供養する人は無量の功德を得て、無量
の福德を得る也、況んや我が身亦僧の形也、何ぞ僧を忽緒に為む
や、努々此れより後馬に乗り乍ら僧に値う事無かれ」と宣まうと
見て夢覚めぬ、

。姨母をいをいと叫べど、男答えも不為で逃げて家に返えりぬ、然
して家にて思うに、妻に被責れて此く山に弃てつれども、年来祖
の如く養いて相副いて有りつるに、此れを弃つるが糸悲しく思え
けるに、此の山の上より月の糸明るく差し出でたりければ、終夜
不被寢ず恋しく思いて、独り言に此くなむ云いける、「わがここ
ろなぐさめかねつさらしなやをばすてやまにてるつきをみて」と
云いて、亦其の山の峰に行きて姨母を迎え將來たりける、然して

本の如くぞ養いける、

第六段

此の後光時涙を流して咎を悔いて、上下を論ぜず僧の來たるを見
ては遠くより下馬して礼しけりとなむ、

然れば今の妻の云わむ事に付きて、由無き事を不可免ず、今も然
る事は有りぬべし、然して其の山をば其れよりなむ姨母弁山と云
いける、難喫しと云う譬には旧事に此れを云うにぞ、其の前には
冠山とぞ云いける、冠の中子に似たりけるとぞ、

第七段

。語り伝えたとや、

以上の説話も大方この類で、ただ第二段と第六段の所の言葉に
多少の違いがあるだけで、全説話がこの形式に統一されていると
いっても差しつかえないと思う。すなわち

第一段は起筆であり、

第二段は説話の主人公である事件を引き起こすべき主格の説明を
しており、

第三段は次ぎに起こる事件の原因となっており、予備段階であり、
発現の様子を述べている。

第四段はその事件の中心点で、状況が記され、経過である。いか
に推移していったかを述べている。

第五段はその事件の結果を知らせ、どうなったかを記している。

第六段は作者の批判であり、話者の感想である。だからどうしなく
てはならぬ、というような教訓があり、だからこうなったのである。
という謂われなども見える。この教訓をその当時の幼少年たちに戒
しめとしてさとすれば、童話の教育的価値が生じて、その時代
の子供たちはその教えを守ろうと努力したことであろう。空想の多
い幼少年には話の内容も不思議に思われるだろうが、その戒しめは

心に強く印象づけられると思う。

第七段の「かく語り伝へたる」所に説話、伝説としての特質が存
する。僧は仏教信仰者に、父母は子供たちに、そして有識者は一般
庶民にそれぞれ語り伝え、教え知らせ広めたであろうと思う。この
語り伝へべき相手が童幼である場合に、童話としての価値が生まれ
て来る。御仏けの加護、利生の有りがたき、世俗、悪行の恐ろしさ
などに幼い心を動かしただであろう。「三つ子のたましい百までも」
この年代の精神教育こそ、まことに大切であって童話として大いに
活用されたことと思う。

山岸徳平氏も今昔物語形式は、一つが千有余話の形式であり、千
有余話の形式が一つの説話形式である。ということ左のように云
っている。

「各説話のいづれを取ってもまた、集全体の文体の縮図と見られ
る。すなわち結構における起首、結尾の同一であるのや、素材の排
列などは全く定型的に扱われた。その点は他の物語などの作者と全
く異なる編者の態度である。」と。

この叙述形式は、この類の説話の根本形式となつて、今昔物語以
後に著わされた説話の規範となり、源泉となつて後世の童話形式も
ここに起因していると思つて差しつかえないと考える。今昔物語の説
話形式が基準となつていると私は信じている。

また第一段と第七段はほとんど画一的形式になつているのは前述
した通りであるが、第二段と第六段の手法について少しく調べてみ
ると、多少そこに差異のあることがわかる。著者はここに幾分意を
用いたのではあるまいか。結尾の第七段の文にも幾らかの変化はう
かがえる。

(一)第二段の形式の差異

①今は昔、聖武天皇東大寺を造給ふ、

②今は昔、大織冠未だ内大臣にも不成給して只人にて在ましける時、

③今は昔、天明天皇奈良の都の飛鳥の郷に、元興寺を建立し給ふ、

④今は昔、文徳天皇の御代に智証大師と申す聖在ましけり、

⑤今は昔、聖武天皇東大寺を造て開眼供養し給はむと為るに、其時に行基と云ふ人有り、

⑥今は昔、聖武天皇の御代に道慈神叡と云ふ二人の僧有けり、

⑦今は昔、本朝□□天皇の御代に役の優婆塞と申す聖人御けり、

⑧今は昔、高野姫天皇は聖武天皇の御娘に御ます、

⑨今は昔、弘法大師真言教諸の所に弘め置給て、

⑩今は昔、文徳天皇の御代に、新羅国に仰せ遣す事を不用ざりければ、大臣公卿被僉議て云く、「彼の国は□□天皇の御代に此の朝に可随き由を申せりき、而るに此く仰せ遣す事を不用ねば末代には悪かりなむ、然れば速に軍を調へて彼の国を可被罰き也」と被定て、其の時鎮守府の將軍藤原の利仁と云ひける人を彼の国に遣せり（けい）、

⑪今は昔、嵯峨の辺などに有ける人にや有けむ、

⑫今は昔、圓融院天皇の御代に、永観二年と云ふ年の七月□日、堀川院にして相撲の節有りける、

⑬今は昔、右近馬場にして競馬有けるに、

⑭今は昔、北辺の左大臣と申す人御座けり、

⑮今は昔、延喜天皇御子の宮の御著袴の料に御屏風を為させ給

て、其の色紙形にて可書き故に、歌読共に各和歌読て奉れと仰せ給ひければ、

⑩今は昔、一条院の天皇の御時に、上東門院始めて内に参らせ給けるに、

⑪今は昔、一条院失させ給て後、後一条院の幼く御座ける時に、

⑫今は昔、河内前司源頼信朝臣と云兵有き、

⑬今は昔、能登の国には鉄の鉄と云なる物を取て、国の司に弁ずる事をなむすなる、

⑭今は昔、陽成院の御ましける所は、二条よりは北、西の洞院よりは西、大炊の御門よりは南、油の小路よりは東二町になむ任せ給ひけるに、

⑮今は昔、官の司に朝庁と云ふ事行ひけり、

⑯今は昔、近江の守□□の□□と云ける人、其の国に有ける間、館に若き男共の勇たる数居て、昔今の物語などして碁雙六を打、萬の遊をして物食酒飲などしける次でに、

以上卷を追い大体並べてみたが、その語法の上からは、

①給ふ

給ふ、給て、給ひければ、給ひけるに

②けり
在ましける時、在ましけり、有けり、御けり、有りける、有けるに、御座ける時に、

給ひければ、給ひけるに、御座けり、しける次でに、

③有り

有り、有りけむ、有りける、有りけるに、有けり、有き

④その他

御ます、遣せり、

などかなり種類のあることがわかる。
それから第二段の書き方に

①人名だけを記したものに、

河内前司源頼信朝臣と云兵有き、

②年代と人名を入れたものに、

文徳天皇の御代に智証大師と申す聖在ましけり、

③人名に説明を加えたものに、

大織冠未だ内大臣にも不成給して只人にて在ましける時、

④地名を入れたものに、

天明天皇奈良の都飛鳥の郷に、元興寺を建立し給ふ、

⑤内容を説明したものに、

延喜天皇御子の宮の御著袴の料に御屏風を為させ給て、其の色紙形に可書き故に、歌読共に各和歌読て奉れと仰せ給ひければ、

⑥系図を述べたものに、

高野姫天皇は聖武天皇の御娘に御ます。

など種々と変化のあることに気付く。千有余の説話の形式が一定していていると思われる中にも、こまかくみれば変化のあることが了解できる。

(二) 第六段の形式の差異

①僧共多く住して行ふ也とぞ、

②功德は少しと云ふとも信に可依き也、

③薬師の誓を可憑奉しとなむ、

④世の人も皆礼み仰ぎ奉るなめり、

⑤人に語けるを聞伝へて、

⑥後に語り伝ふるを聞て、

⑦此の事は慥に記したるを見て、

⑧皆貴びて奇異の事也とて、

⑨其の時に備中の守にて有けるが語り伝へたるを、

(10) 浄照が語を聞き継て、

① 萬葉集にも(にも一作と)と云ふ文に被注たれば、

② 夫妻の間も返合ひ、糸も出来けれど、

大体以上のような種類に分れて見ると見てもよいかと思う。すなわち

○とぞ、也、なむ、なめり聞伝へて、聞て、見て、とて、

伝へたるを、聞き継て、被注たれば、出来けれど、

などの語で、第七段の「語り伝へたる」とや」に接続している。その中で最も多いのは「なむ」で、殆ど九十%以上この語が使われている。つぎは「とぞ」そのつぎが「聞き継て」となっている。これも文章に変化のないように見えて、変化をもちいている作者の意図が伺えるように思う。

(三) つぎに第七段の表現形式の差異

① 古老の伝へを以て語り伝へたるとや、

② 此くなむ語り伝へたるとや、

③ 語り伝へたるとや、

④ 広く語り伝へたるとや、

⑤ 此く語り伝へたるとや、

⑥ 聞き次ぎて語り伝へたるとや、

⑦ 彼の僧の正しく語り伝へたるとや、

⑧ 聞て語り伝へたるとや、

右のように同じく「語り伝へたるとや」でも、記述の上に多少の変化のあることがわかる。古老の伝えによるもの、僧は正しく伝え、あるいは広く言いふらし、いかにも得意顔する者もあり、また聞きに聞きついで語り伝えるものなど、なかなか興味あるものである。この中で最も普通な手法は、終りの「語り伝へたるとや」であり、この第七段への接続語の一般的記述は、「何何となむ」で「何

何となむ、語り伝へたるとや」は、結尾の大部分をしめている。

しかし、文章、語句、修辭、語法などの点については、坂井衡平氏が非常に詳細に論述されておられるので、改めて述べる要もないと考える。

2 内容上より見た説話

今昔物語についての一般的内容研究は、坂井衡平氏をはじめ、他の多くの学者がいろいろの角度から研究しておられるので、私は童話的見地に立って述べてみたいと思う。

そこで私は、今昔物語集作者の本集を作った動機、その目標とする所、その思想、童話的内容などについて概略を記すこととする。

(一) 作者の動機及び目標

印度に起った仏教文明は、次第に近隣へ広がり、遂に中国に渡つて来て、非常な勢いで全土に波及し、また一段と輝かしい仏果を収めた。そしてその次には朝鮮及び日本へ渡来したのであった。すべての物質文明も、精神文明も仏教が基調となつていたと云つても過言ではないと思う。日本へ渡来した物質文明もやはり仏教思想がその根本をなしていたと見ても差しつかえあるまい。漢字の伝来、仏教中心の美術工芸、建築の興隆など数えればいくらでもあろう。

然して同時に中国はもちろん、印度の思想が初めてわが朝に入つて来たのである。従来簡易でん淡に甘んじ、現世の幸福や生活に満足していたわが国民が、始めてあの不可思議無尽蔵の妙法を聴き、これらの新思想に接した時には、どんなにか驚嘆したことであろう。同時にこれらの思想が盛られている文献も続々と渡来し、この偉大な宗教に対して驚異の眼を以て視、かつ迎えたであろう。恐ろしい来世の地獄の説話におののき、また莊嚴で歡喜に満ちた極楽浄土のありさまを夢みては、渴仰の念にたえなかつたに相違ない。当時の僧侶、信者はこれらの説話を物語って人人の興味をそそり、あるい

は輪回転生、三世因果の恐ろしさに庶民の心を奪つたに違いない。このようにして仏法弘通の方便に供したであろう。

平安朝の初期延暦年間には、冥報記、冥報記拾遺などが著わされ、これらの説話が収められた。ついでこの説話と同一形式のものが、地名と人名とを日本に改めて日本靈異記となつて現れるまでになつた。いうまでもなく、諸経典を始めとして冥報記、日本靈異記などは何れも漢文であり、一般庶民にはなかなかわかりにくい。中国式の教育を受けた僧侶、貴族階級の学問をした人たちなら何でもないのであろうが、庶民大衆には容易に解し得るものではない。このような新しい思想を紹介し、仏教思想を宣布するには、どうしてもいわれる大和仮名の文でなくてはならない。僧侶などの口伝だけでは十分というわけには行かないのである。靈驗譚、興味ある世俗譚などの説話を伝承するにはどうしても大和仮名文が必要となるのである。仮名を交えた文を以て記述し、多くの人人に知らせる事が仏教宣布に大切な役目となるのであろう。著者はここに着眼して、わが朝にふさわしい説話を意識的に収集し、わが国の文字で書きおろそうと企画して成つたのがすなわち今昔物語である、と私は見たいのである。

著者の動機は、仏教に刺激され、仏教的説話に刺激を受けて書き集めたに違いない。そうしてあまねく大衆に知らせようとしたのである。私は次の諸点から考えてそう思つたのである。

(1) 過去に仮名交り文の仏教説話がなかった。

(2) 日本靈異記の根本精神によく似ている。日本靈異記の根本精神は、「諸悪莫作、諸善奉行」の道念を勧めたいわゆる「勸化」にあり、この趣旨を今昔物語も継承している。靈異記の説話には、その結尾ごとに概して教訓的の言葉を記しているが今昔物語もこの点大方同様である。

説話にも靈異記にあるものが大分生まれかわっている。聖徳太子の話(内容は異なっているが)役優婆塞の話、仏像奇瑞談、因果説話(善報善果、悪報悪果)、地獄の話、転生談(牛に生まれかわったりする話)、放生談(亀や蟹)、強力談などなど。

(3) 当時は仏教氾濫時代であった。

(4) 著者が僧侶であるだろうという説、少なくとも仏教的素養があり、仏教に精通している人であろうということ、博く漢籍や国典にも通じている人。これは説話の内容から推量してもわかる。

(5) 説話の中に天竺、震旦の説話と同一の趣旨をもった本朝談が再見受けられる。天竺、震旦の部の説話は、一部を除いては純然たる仏法談であって、これを日本化して再説してある点、どうしても仏教信奉者の布教の方便とみてよいと思う。

(卷五第一話は、卷十二第二十八話と同じ、卷七第十五話と卷十三第四話と同じ、卷五第四話と卷十一第二十四話など)

すなわち世道人心の誘掖ということを考慮に入れてみるとみてよく、当時の教化誘導は仏教であり、その任に当る者は僧侶階級であった。童話の目的の一部も、幼少年の誘掖、世道教化にある点で一致している。

第二に今昔物語集著者の目標はどこにあったか。ということについて述べたいと思うが、動機が明瞭になれば従ってその目標も自然に明らかになると思う。そこで内容からみて、

(1) 天竺、震旦の仏教思想を知らせ、その靈験のあらたかなこと、釈尊の偉大なことを紹介しようとしている。

(2) 仏教の効験によって奇瑞があらわれ、不思議なことさえ起こり、唯一無上のものであることを知らせようとしている。

(因果広報、輪回転生、三世因果、法力、現報など)

(3) 全説話のうち仏教に関する説話(仏教談)がその大半を占めて

いる点からみて、

(4) 仏教思想が説話の根底となっており、全巻にわたっている。

(5) 形式的にみて、必ず最後に日本靈異記のように訓戒をもって来ており、教訓的である。巷談街説を記していても、必ず仏果を説いて「だからこうしなくてはならないぞ」と、教えている点からも目標がどこに存在しているかがわかる。

以上の点から仏教思想の宣布と、未知の者に対する啓蒙に資せんとしたのであろう。由来人間は、この世に生まれると同時に、宗教心の先天的な芽ばえが伸びはじめ、年月と共に段々成長して行くことを認めているが、この芽を伸ばす糧となるものは、これらの興味深い説話である。当時の童幼たちは、父母から直接、あるいは父母に同行してお寺へ行き、仏像の前で、または僧の説話により、仏教説話を聴かされ、ひそかに心のうちに崇仏畏敬の念をいだき、また因果応報を恐れたことであろう。そして幼な心に深い印象を受けたことと思う。

(二) 説話に現れた思想

同じく思想といっても、ここでは表題にも示した通り、童話の見地から眺めた説話の思想であり、説話に含まれている思想の中から童話方面に関係のあるものを抽出して述べたいと考えている。前にもちょっと述べたと思うが、道徳的哲学的内容、史学的内容などという方面は坂井衡平氏によって極めて精細に、周到に論じつくされているので、ここで改めて論述するまでもないことであり、また今回の私の求めようとしている点とは、多少の隔たりもあり、この点は省略することにした。

そこで、説話の内容を検討する前に、まず童幼はいかなる心情をいだいているか、児童の本能はどうであるかについて一言述べてみたいと思う。すなわち、児童はどんな心理的内容の話に愉悅と興味

とを感じるか。その話の中に、どんな心理的要素の内在が必要なのであるか。ということになるのである。つぎに項目的に挙げてみよう。

(1) 親密性と反親密性との微妙な交錯結合を望んでいる。

(2) よい意味での観念的想像的である。これらの要素の豊富である話を望んでいる。

(3) 全心的に揺り動かされる内在美を求める。内在美はひとり物質的の美ばかりではない。霊的精神的なものもある。すなわち、「善」という道徳的美と、「真」という知力的美である。

(4) 行為の価値に対する当然の応報の顕現を求める。正しい行為は褒賞され、邪悪な行為に対しては責罰せられることを望む。このことによって童幼に情緒的満足と、道徳的満足とが与えられる。

同時に大きい感興と愉悦とが与えられる。

(5) 児童自身の心理の反映であり、生活の縮図であることを望む。活動と冒険とを愛好し、動物を好み、探究性に富んでいて、日常生活はあらゆる事物や現象に対する好奇と詮索とに終始している。

以上の諸要素は一つの童話の中に入っていて、どれも残らず満足せられるものでは勿論ない。項目の中のどれかが、どれかの部分の一つ乃至二つ、あるいは三つ四つを含んでいることがあるかも知れない。この点は決定されているのではないから自由である。あるいはこの要素以外の、もっと小さい要素もあろう。結局これらの諸要素を満たす説話が、童話としての本質を有するものでなくてはならぬ。これらのことを欲求する童幼の本能は先天的のものであって、ひとり現代の童幼のみに当てはまるものではないと思う。古往今來この欲求心には変りはない。ただ第五項の「生活の縮図であること」を望む」点では、時代によって可なり内容も変化しているかも知れ

ないが、そんなに格段な差のあるべきはずはない。先天的本能は、生まれる前からすでに潜在しているといってもよいからである。但し、この欲求する本能の満足によって、咀嚼し消化して、創造的反応として外界に表わす時には、時代のいかに異なってくることもあるのであろうと考える。

これらの童幼の本能的な欲求を根底として、この意味から本集説話の内容を検討して、個々の説話全体としての内容と、その中に盛り込まれている時代精神とを考察し、説話のどの部分が、その思想のどの点が童話としての価値を有しているか、その説話のどの点に主眼を置いていたかなどについて述べたいが、膨大な説話を一つ一つ略述しても巻第十一から巻第三十一までを記すとすればそれだけで約六十頁を要するので、ここでは一二の例を挙げる程度にとどめたい。

本朝部の仏法談、世俗談の説話全部では六百九十話もあり、大部となるので、一、二の例だけにすることとする。

○仏法談(本朝の部)

卷第十一(本朝附仏法)

聖徳太子於此朝始弘仏法語第一

行基菩薩學仏法導人語第二

役(江下同)優婆塞誦持呪驅鬼神語第三

。何れも神通力、法力により驚異的な行動を起こしている。

卷第十二

越後国神融聖人縛雷起塔語第一

紀伊国人漂海依仏助存命語第十四

卷第十三

石山好尊聖人誦法花経免難語第二十

天王寺僧道公誦法花救道祖語第卅四

。法花経の功德により救われる物語

卷第十四

紀伊国道成寺僧写法花救地語第三

越後国乙寺僧為猿写法花語第六

修行僧至越中(イ国字アリ)立山会小女語第七

越中国書生妻死墮立山地獄語第八

法花経の法力、聖人の僧に救われた物語

卷第十五

元興寺智光頼光往生語第一

卷第十六、卷第十七

第十六は観音利生記、卷第十七は地藏靈験記で、どの説話もまことに面白い、感興の多い物語に満たされ、童幼の幻想を満足させ、予

期感を満たしてくれるもので楽しい。

仕観音人行龍宮得富語第十五(卷第十六)

伊勢国人依地藏助存命語第十三(卷第十七)

卷第十八(諸本並二欠冊)

卷第十九

この巻の説話中、前半はほとんど出家談でうずまっている。僧侶あり、武士あり、出家の動機もそれぞれ異なっていて興味が深い。

西京仕鷹者見夢出家語第八

卷第二十

天竺天狗聞海水音渡此朝語第一

龍王为天狗被取語第十一

この巻は天狗の話と、悪業をすれば必ず悪果がくることを知らせ、善根を施せば必ず善果至るといふ話が主体である。

○世俗談(本朝の部)

卷第二十一(原本闕)

卷第二十二

大識冠始賜藤原姓語第一

卷第二十三(本朝附大織冠)

この巻には武勇譚、大力譚が非常に多く、仏法談の神通力や法力によ

る神仏の靈験的な説話とは全く変わり、これらの実力談は趣があり、

生々しく親しみもあり、現実的な点で力強さを感じる。

広沢寛朝僧正強力語第廿

大学衆試相撲人成村語第廿一

相撲人海恒世会地試力語第廿二

卷第二十四(本朝附世俗)

高隅親王造人形立田中語第二

百済川成飛驒工挑語第五

いづれも技芸譚で、後者は両工匠の腕比べの話、これは一時小学校の国語教科書に載せられたことがある。

安部晴明随忠行習道語第十六

陰陽術の神技を紹介したもので、天地の科学者として、易学の予言者として当代に重きをなした説話、陰陽術の話はまだ十八話、十九話、廿一話にも出ている。

玄象琵琶為鬼被取語第廿四

このほかに第廿六話以後に作詩、和歌などの物語があり、詩歌談は三十二話も記されている。当時の詩歌隆盛の様子が伺われるが、いづれも貴族階級の説話で、第四十九話だけが庶民の貧女の和歌談だが、しかも貧女が詠んだのではなく、蓮の葉に書かれてあるのを発見した説話である。

卷第二十五(本朝附世俗)

平将門発謀反被誅語第一

藤原純友依海賊被誅語第二

将門、純友の反乱による戦争談で、邪は正に勝てないことを知らしめてくれるもの。

源宛平良文合戦語第三

平維茂郎等被殺語第四

後者は仇討物語で、後代の曾我物語や赤穂義士の話は、成人も幼少年たちも喜ぶ物語である。

源頼義朝臣副安陪貞任語第十三

。国史にもある「前九年の役」の物語で、英雄譚として典型的のものである。すなわち歴史譚としての初めのものが英雄譚なのである。

卷第二十六（本朝附宿報）

於但馬国鷲取若子語第一

美濃国因幡河出水流入語第三

。この二つは奇蹟談である。

卷第二十七（本朝附靈鬼）

冷泉院水精成人形被掘出語第五

東三条銅精成人形被掘出語第六

。この二話は、水の精と銅の精の不思議な物語で中々面白い説話であり、童幼の喜びそうな話である。

卷第二十八（本朝附世俗）

。この巻は軽い滑稽を含んだ物語が多く、悪気のない失敗譚が載せられている。

豊後講師謀徒鎮西上洛語第十五

阿蘇史直盗人謀遁語第十六

池尾禅珍内供鼻語第二十

卷第二十九（本朝附悪行）

。前半は盗賊談が多いが、後半には面白くも勇ましい童幼向きの説話がかなり見られる。次の話は狗の主人に対しての忠義談で、馬琴の「椿説弓張月」にそのまま出ていて、主人為朝を救ったことになって、いる有名な物語である。

肥奥国狗山狗昨殺大蛇語第三十二

肥後国鷲取殺地語第三十三

。この説話は、大鷲と大蛇との一騎打ちの物語で勇壮な話、童幼の喜びそうな話である。

卷第三十（本朝附雑事）

信濃国娘母弃山語第九

。現代にまで知られている「娘捨山」の話。

卷第三十一（本朝附雑事）

陸奥国安倍頼時行胡国归来（二字一作空返）語第十一

鎮西人至度羅島值虎語第十二

讃岐国満農池額国司語第廿二

竹取翁於算中見付女兒養立語第卅三

。前の二話は探険談で、三番目のは弘法大師のつくられた満農池に關連した説話で、欲ばり国司が天罰を受けた話、四番目は「竹取物語」転記であろう。但し文章は、他の説話と同じように要約的に記されている。

以上で各巻より一、二の例話を抜き出してみたのであるが、必ずしもその巻の代表的のものとは云い難いかも知れぬ。しかし童話的要素の含まれている、という点では誤りないと思っている。そこでこれらを要約してみれば、以下のようなになる。

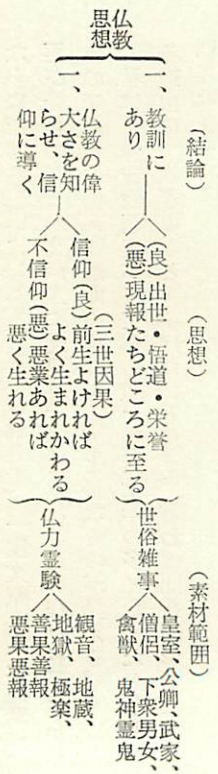
(1) 説話の焦点は、

弘法談 崇仏・信仰・靈驗（現世・来世）であり、宿報、地獄・極楽の思想によってこれを知らそうとしており、

世俗談 勸善・怪異・世情で

教訓・靈鬼・狐猪変化・迷信・夢知らせなどによりあまねく庶民に知らせようとしているのである。

更にこれを表にしてみれば、
(2) 総括（未完結のもの）



さて、最後に当時の諸物語の内容と比較した点について略記すれば、

- (1) 本集は純然たる仏教説話文学である。(内面的に)
- (2) 本集の根底を流れている精神は不変であるが、個々の説話に見えている精神には互いに関係がない。
- (3) 本集説話の素材は、あらゆる階級を含んでいる。
- (4) 説話文学の本質として、連続的物語ではない。
- (5) 説話の表面的な意味からしては、世情を描写している。まず一般的よりして大体、以上のようになるのではないかと考える。(未熟な点も多いことと考へ、大方の御叱正を請う。)

第四、後世への展開

後世への影響については、芳賀博士あるいは坂井衡平氏を始め、他の学者、研究者の諸氏がいずれもそれぞれの立場から研究発表をしておられるので、ここに改めて再説する要もないと思う。そこで私は表題に従って後世の童話に与えた影響、展開について一言述べさせてもらうこととする。

今昔物語が、説話文学に与えた影響については、直接的と間接的とに分けて先輩諸氏は論述されており、宇治拾遺物語、古今著聞集、古事談、沙石集、私聚百因縁集、謡曲など多くの文学書のあること、間接的影響については、仏教説話に関するもの、縁起物絵巻、伝記、歴史または世俗説話を中心としたもの、軍記物語風のもの、恋愛物語風のものなど非常に多いことを挙げています。

芳賀博士は、「各種の伝説が直接今昔物語集から出て後の文学に入ったことは非常に多いが、あなたがち今昔物語そのものからというわけではなく、民間説話として口碑に伝わり、それが後の文学の材料となったものも多いことも注意しなければならぬ。而してその古い説話が今昔物語に書き留められていることの興味を感じなければ

ならぬ。」といっているが全くその通りで、一度文献を出た説話が、再び後世のどこか文献上に逆戻りするようなことも往々見受けられるのである。例えば謡曲の中にもこのようなものが見える。

私は、今昔物語集が出てから急に説話文学の多くなったと思われる理由に、次ぎのことを挙げたいと思う。言わば間接的影響とでもいふべきか。

- (1) 平安朝時代から鎌倉時代に移って、仏教はますます興隆し、真の日本仏教としての価値が表われてきたこと。
 - (2) 右の理由から、仏教はいよいよ広められ、従って仏教説話集の今昔物語は他の仏教話集と共にますます傳承されて、その価値が認められたと思われること。
 - (3) 仏教のありがたさ、仏の偉大さ、経文の尊とさなどが知らされ、一般庶民をして信仰に導びくには、これらの説話により具体的例話として話したほうが効果的であること。
 - (4) 鎌倉、室町期にかけては戦乱が相つぎ、世の中が不安であった為、平安時代のような絢爛たる貴族文学の生まれる機会が少なかったこと。
 - (5) 世の中が不安であると、人間は、特に大衆は心のより所を得ようとして神仏にすがれる気持が高まり、靈驗あらたかと信じられる仏に心身を任そうとすること。
 - (6) 今昔物語によって説話の面白さ、当時の社会百般の様子が伺い知らされ、巷談術説、武勇談、歴史物語などにも面白さが多く感じられたこと。
- 大体以上のような理由で今昔物語を主体として非常に多くの説話形式の書がつぎつぎに表れて来たと考えられる。説話内容が直接今昔物語と関連していなくてもよい。あるものは説話の記述形式が似通っているものもある。これも間接的影響と見て差しつかえないのでは

ないか。江戸時代を経て、現代の文芸童話の前までに改作、あるいは翻案されて広く活用しているのを見ることが出来る。

今昔物語の童話的価値

童話的価値を、叙述形式の確立と現代童話への直接影響との二方面から考えてみたいと思う。

(一) 童話的叙述形式の確立

今昔物語集説話の記述形式が七つの段落から成りたっていることは、すでに述べた所であるが、その形式が元になって童話の叙述形式が確立したことを述べようと思う。もっともこの形式確立ということは、江戸時代から明治大正の年代頃までで、最近の童話形式や童話観は、いちじるしく躍進して、「昔噺」式の型にとらわれず、話の内容もまったく豊富になり、広い範囲にわたり芸術作品的になつてきていることは周知の事実であるが、しかし他の一面では全然皆無というでもない。在来の型による古典風の童話も見られるのである。

さて、順序としてもう一度短篇の説話を例に挙げて考えてみることにする。

近江国栗太郡伐大作語第卅七（卷第三十一、本朝附雜事）

第一段（起筆）

今は昔、

第二段（事件を引き起こすべき説話の主格の説明）

近江国栗太の郡に大きな杵の樹生たりけり、

第三段（事件の原因であり、予備であり、発現の様子を述べるもの）

其の困五百尋也、然れば其の木の高さ枝を差たる程を思ひ可遣し、其の影朝には丹波の国に差し、夕には伊勢の国に差す、霹靂する時にも不動ず、大風吹く時にも不揺す、

第四段（事件の中心、状況、経過である）

而る間其の国の志賀栗太甲賀三郎の百姓、此の木の陰を（えい）覆ひて日不當ざる故に田畠を作り得る事無し、此れに依て其郡々の百姓等天皇に此由を奏す、天皇即掃守の宿禰□□等を遣はして百姓の申すに随て此樹を伐倒してけり、

第五段（どうなったか、事件の結果）

然れば其樹伐り倒して後ち百姓田畠を作るに豊饒なる事を得たりけり、彼の奏したる百姓の子孫干今其郡に有り、

第六段（作者の批判、感想、教訓などを表わす）

昔は此る大きな木なむ有りける、此れ希有の事也となむ、

第七段（結尾、世の人人の喩、伝説の意）

語り伝へたるとや。

右のように極めて整然と区切られているが、この形式が童話の確立した江戸時代に正しく継承されていると思う。試みに馬琴の「燕石裸志」に載せられている童話の、「桃太郎」譚にとつてみるならば、

⑤ 桃太郎（燕石裸志卷之四）

第一段

昔

第二段

老夫婦ありけり

第三段

夫は薪を山に折り、婦は流に沿うて衣を洗ふに、桃実一つ流れて来つ。携へかへりて夫に示すに、その桃おのづから破れて中に男児ありけり。

第四段

①この老夫婦元來子なし、この桃の中なる児を見て、喜びてこれを養育み、その名を桃太郎と呼ぶ程に、その児忽地大きになりつ

つ、臂力人に優れて一郷に敵なし。

②一日その母に、黍団子といふもの影とゞのへて給はれといふ。母その故を問へば、鬼が嶋に赴きて宝を得ん為なりと答ふ。父聞きていと勇と誉めて、そのいふまゝにす。

③団子既にとゞのへしかば、桃太郎これを腰間に著け、父母に辞し別れて、ゆく／＼途に犬あり、その腰間なる黍団子を見て、これ一ツ賜はらば従者たらんといふに取らしつ。又猿と雉子とにあり。みな黍団子を与へて従者とし、遂に鬼が嶋に至り、その窟を攻めて鬼王を擒にす。

④鬼どもその敵しがたきを見て、三ツの宝物隠篋、隠笠、打出小槌を献つりて主の命乞せり。

第五段

斯て桃太郎その宝を受けて鬼王を放し、犬猿雉子を將て故郷に帰り、思ふまゝに富み榮えて、

第六段

父母を安楽に養ひし

第七段

といふ事。

となる。その他の兎の大手柄。彌猴の生胆、花咲翁、舌切雀、浦島之子などの童話も多少の差はあるが、右の七段の叙述形式に分けることができ、ここに童話としての分野の確立と同時に、この型の確立が成り立ったわけである。

続いて明治になり、巖谷小波氏が江戸時代の童話からヒントを得て、ここに二十四編の「日本昔噺」を翻案し、童話の基礎を建設したので、初めて童話文学という一分野が画然と創り出されたのであった。

二十四編は左記のものである。

桃太郎、玉の井、猿蟹合戦、松山鏡、花咲翁、大江山、舌切雀、俵藤太、かち／＼山、狸取り、物呉太郎、文福茶釜、八頭の大蛇、兎と鰐、羅生門、猿と海月、安達原、浦島太郎、一寸法師、金太郎、雲雀山、猫の草紙、牛若丸、鼠の嫁入

以上の中から、代表的な「桃太郎」を摘出して、七段形式に当てはめてみるならば、

第一段

むかし／＼、

第二段

ある所におぢいさんとおばあさんがありました。

第三段

お爺さんは山へしばかりに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。

お婆さんが洗濯をしてみますと、大きな桃が流れて来ました。

第四段

お婆さんはその桃を拾って帰りました。お爺さんが山から帰って来まして、その桃を切らうとしますと、桃が二つに割れて、中から大きな男の子が生まれました。お爺さんはその子に、桃太郎といふ名をつけました。桃太郎は生れた時から大変力が強うございました。

第五段

桃太郎は段々大きくなって、大層強くなりました。或る日お爺さんに鬼ヶ島へ征伐に行くからといって黍団子を作ってもらい、仕度をして勇んで家を出掛けました。途中まで来ると、急に犬がとび出して来て、「桃太郎さん／＼。お腰のものは何ですか一つ下さい。お供します。」と云ふと、「これは日本一の黍団子。鬼ヶ島へ鬼征伐に行くからついて来い。」と団子をやり、犬をお供につれて行くと、又猿が来ました。猿ももらってお供になりまし

た。少し行くと雉子がとんで来ました。雉子も団子をもらって家来になりました。

鬼ヶ島へ着いてみますと、鬼共は鉄の門をしめて、城を守っています。門を破って攻込みました。雉子はずきまはり、猿はひっかきまはり、犬はかみついて忽ち鬼の家来をやっつけてしまひました。

桃太郎は刀を抜いて、一番大きな鬼に向つて散々な目にあはせました。

第六段

鬼共はとう／＼降参して、大事な宝物を沢山出しました。桃太郎はそれを車に積んで凱旋しました。

車が積んだ宝物、

犬が引出すエンヤラヤ。

猿が後押すエンヤラヤ。

雉子がつな引くエンヤラヤ。

第七段

めでたし／＼。

以上でもわかるように、七段形式がはっきりと形づくられていく。このように今昔物語の説話形式は、ついに現代にまで展開し、大きく影響を与えているのである。私はここに於て、今昔物語の叙述形式がいかに後世に大きい影響を及ぼしているか、偉大なものであるかということ云々を云いたいのである。

(二) 現代童話への直接的影響

室町末期の「お伽草子」を中心とした時代から、江戸時代の「草雙紙、続本」時代にはいると、この頃から次第に童話のために、という考えが現われ始めて、童話向きのものが改めて一分野を担当するようになってきた。と考へてもよいのではあるまいか。前期まで

の時代では、特に童話のための童話として區別したのではなくて、(尤も十訓抄のように特殊なものがあったが、これは特例である。)少年向きも青年向きもなく、ただ混成されたものがあるだけであった。成人向きの話もあれば、子供向きのものもその書物の中にはいつているというわけで、特に子供向きに童話のため編まれたものは殆ど無いといつてもよい。ところが草雙紙、読本、黄表紙などは童話を本体としたもので、(後には多少変つてきたが)ようやくこの期から童話としての領域が區別されはじめてきたのである。語の上からも「童話」という言葉さえ、馬琴などの書に見えはじめてきたことは、前にも少し述べた通りで、たとえ曲がりなりにも、それがまた正鵠を得ていないにしても、馬琴や京伝などによつて童話の考証をしはじめたことは、一歩前進したと見てよい。現代の童話が純然たる文学の一分野であり、社会一般から童話として少年に対する大きい使命を認識せられるようになったそもその始めはこの時代にある。私は信じている。

而して、その童話自身の内容は教訓的の所もあるが、主として興味本位であり、面白いことが第一義であつた。まだ童話とはいかなるものか。いかにすべきか。童話の本義は何か、などという根本的な童話それ自身の本質的研究や自覚はないので、言わば子供への「お伽」を主とした時代であつた。しかし童話の分野を區別しはじめただけでも大きい飛躍で、内容はさておき、子供向きに改編された功は、それが江戸期における時代の自然的な趣向であるとはいへ、正にエポックメーカーとして見のがせない点であり、このきっかけによつて現代童話の芽を出しはじめ、特に古典童話の興隆に寄与していると考へる次第である。

前おきが少し長くなつたが、現代において今昔物語集の採択されている童話書は非常に数多いが、その中で代表的と思われる左記

四種を選んで、これについて少し述べさせてもらうことにする。

- (一)和田 万吉著 竹取物語・今昔物語・謡曲物語(日本児童文庫、アルス刊)
- (二)門馬 常次著 こども今昔物語(イデア書院刊)
- (三)松村 武雄著 日本童話集(上) (世界童話大系、金正堂刊)
- (四)菊池 寛著 日本童話集(上・下) (小学生全集、春秋社刊)

(一)和田万吉著 今昔物語(収録計三十二話)

表	題	巻次	原作の分類	話次
須達長者の話		巻一	天竺部	第三十一話
怪貪女の話		巻三	全	第二十三話
阿育王が地獄を造った話		巻四	全	第五話
亀が猿にだまされる話		巻五	天竺附仏前	第二十五話
老人を他国の流した話		全	全	第三十二話
足に踏み貫きをした象の話		全	全	第二十七話
亀を放した人の話		巻九	震旦附孝養	第十三話
罪を被って死を争ふ兄弟の話		全	全	第四話
招孝といふ人詩の主を慕ふ話		巻十	震旦附国史	第八話
季礼といふ人劔を木にかけた話		全	全	第二十話
玉造り下和の話		全	全	第二十九話
塔を造って殺されかけた石工の話		全	全	第三十五話
二つの国互に戦ひを挑む話		巻十	全	第三十一話
魚が法華経となった話		巻十二	本朝附仏法	第二十七話
智光頼光の二僧往生の話		巻十五	全	第一話
郡司、観音の像を造る話		巻十六	全	第五話
清滝河の僧慢心して後悔する話		巻廿	全	第三十九話
敦行・我が門より隣家の死人を出す話		全	全	第四十四話
獵師が神前の生け贄を止めた話		巻廿六	本朝附宿報	第七話
登照といふ人倒るゝ門の相を見た話		巻廿四	本朝附世俗	第二十一話

(二)門馬常次著 こども今昔物語(収録計二十話)

表	題	巻次	原作の分類	話次
大江匡衡が歌をよむ話		巻廿四	本朝附世俗	第五十二話
郡司が歌をよんだ話		全	全	第五十五話
保昌、盗人袴垂れに逢ふ話		巻廿五	全	第七話
源頼義、馬盗人を射殺す話		全	全	第十二話
三好清行の家移りの話		巻廿七	本朝附靈鬼	第三十一話
毒茸を食べてあたりぬ僧の話		巻廿八	本朝附世俗	第十八話
藤原陳忠が木曾の御坂に落ちた話		全	全	第三十八話
瓜を盗み食はれた話		全	全	第四十話
瓜山の狗、大蛇を食ひ殺す話		巻廿九	本朝附悪行	第三十二話
新羅に渡って虎に遭った人の話		全	全	第三十一話
安部頼時朝の国に行つて帰る話		巻卅一	本朝附雑事	第十一話
満農の池を頼した国司の話		全	全	第二十二話
いけにへの身代り		巻廿六	本朝附宿報	第七話
猿の恩返し		巻廿九	本朝附悪行	第三十五話
蜂の雲		全	全	第三十六話
賢い犬		全	全	第三十二話
驚のくひ残し		巻廿六	本朝附宿報	第一話
犬のおよめさん		巻卅一	本朝附雑事	第十五話
水の精		巻廿七	本朝附靈鬼	第五話
竹取のおきな		巻卅一	本朝附雑事	第三十三話
観音聖人		巻廿六	本朝附宿報	第十八話
あその史		巻廿八	本朝附世俗	第十六話
強い／＼平季武		巻廿七	本朝附靈鬼	第四十三話
面白いうでくらべ		巻廿四	本朝附世俗	第五話
瓜くひ老人		巻廿八	全	第四十話
貧乏男の一本わら		巻十六	本朝附仏法	第二十八話
禪珍の鼻		巻廿八	本朝附世俗	第二十話
臆病さむらひ		全	全	第四十二話
をばすて山		巻卅	本朝附雑事	第九話

董草と紫苑 つばめすら 鰐つり	卷卅一 卷卅一 卷卅三	本朝附雜事 全 本朝附大織冠	第二十七話 第十三話 第二十三話
-----------------------	-------------------	----------------------	------------------------

〔三〕松村武雄著 日本童話集(収録計二十話)			
和尚さんの長鼻	卷廿八	本朝附世俗	第二十話
術比べ	卷廿四	全	第五話
黒石物語	卷廿六	本朝附宿報	第十三話
猿神退治(一)	全	全	第七話
全 (二)	全	全	第八話
狭捨山	卷卅一	本朝附雜事	第九話
赫夜姫	全	全	第三十三話
墓の中の獲物	卷廿八	本朝附世俗	第四十四話
米糞上人	全	全	第二十四話
不思議な帯	卷廿六	本朝附宿報	第十二話
鈴鹿の三人男	卷廿七	本朝附靈鬼	第四十四話
墓の植草	卷卅一	本朝附雜事	第二十七話
臆病な夫婦	卷廿八	本朝附世俗	第四十二話
はさまれ猿	卷廿九	本朝附悪行	第三十五話
鬼の橋	卷廿七	本朝附靈鬼	第十九話
勢徳丸	卷廿六	本朝附宿報	第五話
野猪のしくじり	卷廿七	本朝附靈鬼	第三十六話
鷲の力	卷廿九	本朝附悪行	第三十三話
熊蜂の恩返し	卷廿九	全	第三十六話
葉しへ物語	卷十六	本朝附仏法	第二十六話

なお、類似譚と思われるもの(四話)	卷廿八	本朝附世俗	第八話 類似
榎本僧正	卷十九	本朝附仏法	第二十九話
正直の報	卷廿九	本朝附悪行	第三十六話
蟹の恩返し	卷卅一	本朝附雜事	第十四話

なお、類似譚と思われるもの(四話)	卷廿八	本朝附世俗	第八話 類似
榎本僧正	卷十九	本朝附仏法	第二十九話
正直の報	卷廿九	本朝附悪行	第三十六話
蟹の恩返し	卷卅一	本朝附雜事	第十四話

飼池池寛著 日本童話集上・下(収録計三話)

一ボンノワラ	卷十六	本朝附仏法	第二十八話
シュジンヲタスケタ犬	卷廿九	本朝附悪行	第三十二話
うばすて山	卷卅一	本朝附雜事	第九話

なお、類似譚と思われるもの(五話)

石のしか	卷十六	本朝附仏法	観音靈験談
たからくらべ	全	全	全
羅生門	卷廿七	本朝附靈鬼	第十三話 類似
オサルのオヨメ	卷卅一	本朝附雜事	第十五話 類似
竹篋太郎	卷廿六	本朝附宿報	第七話 類似

以上の四書について採択された説話数は、

今昔物語(日本児童文庫)	三二	日本童話集(世界童話大系)	二〇
こども今昔物語(イデア書院)	二〇	日本童話集(小学生全集)	三

この計七十五話を、原典今昔物語に当てはめて区分してみるとつぎのようになる。

今昔物語準拠表(計七十五話) 類似談九話は除く	部分類	巻次	話次	内採択された話数	話数計
天竺部	卷一	第三十一話	一	一	
全	卷三	第二十三話	一	一	
全	卷四	第五話	一	一	
天竺附仏前	卷五	第二十五話、第二十七話、第三十二話	三	三	
震旦附孝養	卷九	第四話、第十三話	二	二	
震旦附困史	卷十	第八話、第二十話、第二十九話、第三十一話	四	四	
本朝附仏法	卷十二	第三十五話	一	一	
全	卷十五	第二十七話	一	一	

本朝附仏法	卷十六	第五話、第二十六話、第二十八話(二)	四
全	卷二十	第三十九話、第四十四話	二
本朝附大織冠	卷廿三	第二十三話	一
本朝附世俗	卷廿四	第五話(二)、第二十一話、第五十二話、第五十五話	五
全	卷廿五	第七話、第十二話	二
本朝版宿報	卷廿六	第七話(三)、第一話、第五話、第八話、第十二話、第十三話、第十八話	九
本朝附毒鬼	卷廿七	第五話、第十九話、第三十一話、第三十六話、第四十三話、第四十六話	六
本朝附世俗	卷廿八	第十六話、第十八話、第二十話(二)、第二十四話、第三十八話、第四十話(二)、第四十二話(二)、第四十四話	十一
本朝附悪行	卷廿九	第三十一話、第三十二話(三)、第三十三話、第三十五話(二)、第三十六話(一)	九
本朝附雜事	卷卅	第九話(二)、第十三話	四
全	卷卅一	第十一話、第十五話、第二十二話、第二十七話(二)、第三十三話(二)	七

右の統計から、それぞれの著者は、卷二十八の本朝世俗談が最も興味あるものとの考えで、偶然に一致してしまったのであろう。ついで卷二十六の本朝宿報談と、卷二十八の本朝悪行談が面白いと認めているように思う。天竺の部で六話、震旦部で七話、本朝仏法談が八話、本朝世俗談が五十四話となっていて断然多い。そこで説話の興味の中心は、本朝世俗談にあることがよくわかる。なお、猿神退治(生實談)三話。狗山の狗、大蛇を食ひ殺す話(二)。姨捨山物語(三話)。

などが説話内容から見て、一般に興味があるらしく一番多く、一本の葉。術比べ、禪珍の鼻。瓜盗人。臆病武士。猿の恩返し。熊蜂の恩返し。萱草と紫苑。赫夜姫。

などが各二話ずつ採られていて、興味を感じる対象となっているようである。

これらの採択された説話を見ても、現代の童話研究者、童話作家、あるいは芥川竜之介、谷崎潤一郎などの諸氏も、童話の分野から離れていかに今昔物語に目をつけ、素材とし、これを資料として童話とか、小説、または脚本作成に高い価値を認めているかがよく理解し得られよう。全巻一千有余編の中には、まだまだいくらでも研究の好資料が内蔵されている。この貴重な古代文献を活用し、再生させることはわれわれの大きな務めである。

近來今昔物語研究が非常に盛んに行なわれていることは、この説話集の価値を再認識したのと言うべきであろう。祖先の遺してくれた文化を知り、民族精神を知り、祖先の文化建設についての苦辛と偉大さに触れ、後継者たる童幼に伝え、教えてやることは我々の大事な責任といわなければならぬ。

私はそう考えて現在まで微力ながらやってきた。今後も続けて行きたいと念じている。

第五、参考資料

- 今回この小論文をまとめるに当たり、参考のために使用し、また以前に読んで再び読み返したものなどを一括してしるせば、
- 新潮社編 文学大辞典
 - 平凡社編 大百科事典
 - 岩波編 哲学辞典
 - 垣内共著 国文学書目集覧
 - 毛利共著 国史大辞典
 - 弘文館編 日本童話協会の編 綜合童話大講座
 - 芳賀矢一著 攷証今昔物語集(天竺、震旦篇)
 - 坂井衡平著 今昔物語集の新研究

- 有朋堂文庫 御伽草紙
 全 燕石雜誌・骨董集
 全 宇津保物語
 國文叢書 今昔物語集(上・下)
 全 古今著聞集
 全 宇治拾遺物語
 全 竹取物語、伊勢物語、土佐日記、枕草子、柴式部日記
 水谷不倒著 読本と草雙紙の研究
 松村武雄著 童話及び児童の研究
 松村武雄著 童話教育新論
 全 日本童話集(上)
 芦谷重常著 童話学
 全 宗教童話の研究
 春秋社編 小学生全集
 和田萬吉著 日本児童文庫
 菊地 寛著 小学童話読本
 全 日本童話集(上・下)
 小川未明著 未明童話集
 巖谷小波著 日本昔噺(合本)
 門馬常次著 ことも今昔物語
 長野當一著 現代語訳日本古典全集「今昔物語」
 全 現代語訳古典日本文学全集「今昔物語」
 村松梢風著 現代語訳今昔物語
 沢田撫松著 日本古典全書 日本靈異記
 日本古典全書 日本靈異記
 日本文学講座 平安時代
 池田龜鑑著 物語文学
 志田義秀著 日本の伝説と童話

学灯社 説話文学の総合探究
 国文学 現代児童文学事典
 解釈と鑑賞 少国民文学の検討
 丹鶴叢書活字本 今昔物語(上・下)
 など直接、間接に裨益する所が多かった。

※後記

一応纏めてみたものの浅学非才の身をつくづく感じた次第で、今後よい指導者に助けていただき、羗馬に鞭打って努力を続けて行きたいと切に念じている。大方の御指教と御叱正を懇望いたします。

(昭、四一、四、二九)